

新庄節美作品に描かれる「探偵」の意義

安達 愛

はじめに

1936年、ミステリー作家としてすでに不動の地位を獲得していた江戸川乱歩は、『少年倶楽部』（大日本雄弁会講談社）において自身初の子ども向け作品「怪人二十面相」の連載を開始する。東京の街を舞台に、神出鬼没の怪人二十面相が暗躍する本作は、名探偵・明智小五郎と二十面相の息もつかせぬスリリングな対決と、明智探偵の助手である小林少年の活躍がおおいに受け、1年間の雑誌連載が終了すると即座に単行本が刊行された。作品の終盤近くでは、小林少年を慕う子どもたちによって少年探偵団が結成されるが、彼らは逃亡を図る二十面相にも臆することなく立ち向かい、見事犯人を捕縛する。子どもたちの純粋な正義感と勇敢な行動は鮮烈な印象を残し、以降のシリーズで本格的に活動を開始する。

乱歩が自身の少年ものについて「昔から少年探偵小説がなかったわけではないが、私の「二十面相」ものは、自讃すれば、画期的な歓迎を受けたといえるであろう。この私の少年ものは戦争で中絶したけれども、戦後は光文社の「少年」に連載をつづけ、探偵小説が少年読者の最大人気読みものになる素地を作った。それがよいことか悪いことかは別として、そういう分野を開拓した一半の力は私にあったのだといってもよさそうである。」⁽¹⁾と評しているように、氏の児童読み物は冒険小説や短編、少女向けも含めて30作以上執筆され、子ども向けミステリーの分野において非常に大きな役割を果たしたと言える。

「少年探偵団」シリーズは、その人気ぶりから数々の関連グッズが作られ、ラジオやテレビなどの媒体にも広がっていった。作品を掲載していた光文社は、作中に登場する少年探偵団のBDバッジと少年探偵手帳を製作して抽選や購入特典として頒布する。そのグッズは子どもたちにとって垂涎的となり、「少年探偵団」ブームに拍車をかけた。

現代児童文学の作家の中にも、子どもの頃に少年探偵団に夢中になった者は多い。数多くのミステリー作品を手がけている新庄節美も、少年時代にこのBDバッジを身につけ、推理小説に夢中になった1人である。単行本を3冊買うともらえるBDバッジを入手した新庄は「うれしかった。物語の世界が現実となって、掌にのってい

た。これで、探偵団の一員になったんだと、上着の胸に穴をあけ、バッジをとめた。」⁽²⁾と当時を回顧している。新庄は自作のあとがきで、推理小説のルールを示したヴァン・ダインの二十則や、推理小説の祖であるエドガー・アラン・ポーの名を紹介するなど、ミステリーへの造詣が深く、戸川安宣によって「現代の児童文学界で、はやみねかおる氏とともに、最もミステリ・スピリットに溢れた作品を発表しつづけている作家」⁽³⁾と評されている。

新庄節美はグラフィックデザイナーをしながら子ども向けの物語を書き始め、『夏休みだけ探偵団①二丁目の犬小屋盗難事件』で第28回講談社児童文学新人賞を受賞し、1988年に同単行本で作家デビューを果たしている。シリーズは3冊刊行され、子どもが選ぶ児童文学賞のうつのみやこども賞も受賞している。

その後は少女怪盗が活躍する「スカーレット・パラソル」シリーズ（講談社、1990-1991）やネズミの私立探偵が主人公の「名探偵チビー」シリーズ（講談社、1994-1996）、オカルトやSFの要素がある「ホラータウン・パニック」シリーズ（小峰書店、1999-2002）、子どもと104歳の老人と一緒に捜査する「マエストロ！ MONNA 探偵事務所」シリーズ（ポプラ社、2005）など、ミステリーを中心に多数の作品を発表し、大人向け推理小説『修羅の夏：江戸冴富蔵捕者暦』（東京創元社、2004）も手がけている。

新庄は、小学生が探偵をして謎を解き明かす作品を多く執筆しており、中でもタイトルに「探偵」の文字が入っている「夏休みだけ探偵団」、「名探偵チビー」、「マエストロ！ MONNA 探偵事務所」の3つのシリーズは、本格的な謎解き推理小説となっている。新庄は「小学生探偵が重大な犯罪の謎に挑む」という実現困難な状況を成立させるため、物語に様々な工夫をこらす。そこで、本稿ではこの3シリーズに焦点を当て、それぞれの作品における事件の特徴や探偵の描かれ方を確認する。そこから新庄節美作品における「探偵」の意義を明らかにすることを目的としている。

なお、日本では戦前、「本来の謎解き小説以外に、怪奇・幻想小説、科学小説、犯罪小説など広範なジャンルを含む用語」⁽⁴⁾として「探偵小説」という言葉が使用されたが、戦後は「ミステリー」や「推理小説」と呼ばれるようになった。本稿では、発表された時代にかかわらず、謎解きやトリック、探偵の活躍を主眼とするいわゆる本格ものを狭義の意味で「推理小説」、本格ものからサスペンス、ホラー、冒険小説などミステリー小説全般を包括する際は「ミステリー」と称する。

1. 作品研究のための背景の整理

具体的なテキストについて考える前に、まずは研究の前提となる推理小説の特徴について整理する。併せて、これまで日本の子ども向けミステリーにおいて「探偵」がどのように描かれてきたのかを確認する。

1-1. 推理小説の特徴

1924年、イギリスの推理作家であるリチャード・オースティン・フリーマンは「探偵小説の技法」⁽⁵⁾というエッセイで、推理小説が多くの読者を獲得しているにもかかわらず、評論家や文学者の間で軽んじられているのは、作品を評価する上で推理小説がどうありうるか、どうあるべきかという観点が形作られていないせいだと指摘している。その上で、推理小説がその他の文学と大きく異なる点は「読者に与える満足が、第一に知的満足である」⁽⁶⁾ことで、知的面白さのためには、文学的質を犠牲にしなければならないこともあると見解を述べる。だからこそ推理小説は読者の求める「知的満足」を与えるために、論理的な道筋によってそれ以外の結論がありえないということを立証すること、つまり物語にきちんとした「決着をつけること」が最も大切なのだと指摘している。

一方、江戸川乱歩は1950年に執筆した「探偵小説の定義と類別」の中で、「探偵小説とは、主として犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く径路の面白さを主眼とする文学である。」⁽⁷⁾と定義づけている。これは本格推理小説を想定したものだが、現代でも多くの論者によって引用されている。

フリーマンが、推理小説に第一に求めるものとして示した「知的満足」は、乱歩が定義づけた「犯罪に関する難解な秘密が、論理的に、徐々に解かれて行く径路の面白さ」によって得られるものである。つまり推理小説とは、犯罪の謎を論理的に解き明かし、事件に決着をつけるその過程を楽しむ文学であると言える。

一方、権田萬治は、フランスの小説家であるボワロー＝ナルスジャック⁽⁸⁾が、推理小説を「謎と恐怖の両義性の文学」(une littérature de l'ambiguïté [sic])⁽⁹⁾と定義したとした上で、推理小説の根本的な特徴が「未知のものを前にしたときの怖れ、そして謎の解決によってもたらされる喜び」⁽¹⁰⁾であると述べる。そして、推理小説が犯罪の謎を扱うのは、「謎は、恐怖に包まれたとき、また、恐怖は謎に包まれたとき、その輝きを何倍にも増す」⁽¹¹⁾からだと指摘している。

乱歩の定義にも示されるが、推理小説が扱う謎は犯罪にまつわる謎であることが多

い。犯罪とは平穏な日常を脅かす危険なものであり、本来ならば回避されなければならない。

佐藤宗子は「冒・犯・侵の構図：描かれた「犯罪」を追って」という論文の中で、鳥越信によって、エーリヒ・ケストナーの『エーミールと探偵たち』⁽¹²⁾が「架空リアリズム」⁽¹³⁾を実現したモデルとされた点について触れ、「子どもたちが日常生活の中で実現してみたくともまずそれはかなわぬということは多々あるが、その最右翼ともいえるのが探偵として犯罪者を追ひ、事件を自らの手で解決に至らしめること」⁽¹⁴⁾であると述べた。

佐藤が指摘するように、子どもが探偵となり、自らの手で「犯罪の謎」を解き明かすというのは本来であれば実現性に乏しい。しかし推理小説とは、手がかりをもとに探偵が事件の謎を解明していく物語であり、読者は自らも知恵をめぐらし推理を行うことで探偵の役割を疑似体験できるのだ。推理小説には物語に「決着をつけること」が求められるため、最終的に悪事は必ず暴かれる。解決が約束されているからこそ、子どもたちは安心して物語の世界を冒険し、最後は日常へと回帰することができるのである。

1-2. 子ども向けミステリーにおける「探偵」の描かれ方

事件と謎解きの関係について、矢野智司は『大人が子どもにおくりとどける40の物語：自己形成のためのレッスン』の中で、「事件は共同体の均衡を打ち破り、正義の天秤は悪の側に傾く。均衡は直ちに回復されなければならない。犯人がわかり、犯罪にふさわしい罰が与えられることで、均衡は回復される。」⁽¹⁵⁾と述べる。さらに、我々の人生における正義の天秤は、実際には少し不当に傾いたままであることが多いが、推理小説の中ではその均衡が完全に回復されるため、読者は日常生活で得ることができないカタルシスを深く感じることができると推理小説の効用について示している。これは前節で確認した通り、推理小説が論理的に事件の謎を全て解き明かし、元の日常へと回帰することが約束されている点と重なる。そして、矢野の言葉を借りるならば、つまり探偵とは共同体において「正義の天秤」が悪の側に傾いた際に、謎を解明することで均衡の回復を図る存在であり、物語における救済者としての役割を担っていると言える。

では、子ども向けミステリーの中では「探偵」はどのように描かれてきたのだろうか。

中島河太郎は『少年小説大系 第7巻：少年探偵小説集』⁽¹⁶⁾の解説で、収録作を中心に大正期から昭和初期にかけての子ども向けミステリーの流れを概説している。森

下雨村が『少年倶楽部』に佐川春風名義で発表した「少年探偵富士夫の冒険」(1923)や、1924年から小酒井不木によって『子供の科学』(子供の科学社)に連載された少年探偵塚原俊夫を主人公としたシリーズでは、まだ十代前半から半ばの少年たちが、大人顔負けの天才的な探偵能力によって次々と事件を解決していく。彼らは、語学堪能であったり、独学であらゆる学問を身につけたりと、子どもとは思えない能力を有しており、すでに学校を退学して私立探偵として働いている。

子ども向けミステリーの黎明期である大正時代の少年探偵たちは、大人と同等、もしくはそれ以上の才能を持つ超人的な存在として描かれていることが多い。その理由として、大人向けの推理小説に登場する探偵たちが、そのまま子どもの姿に置き換えられ、子ども向けの推理小説の中に持ち込まれているからだと考えられる。

そして昭和に入ると、江戸川乱歩の「少年探偵団」シリーズが登場する。中島が、「従来の少年物が少年を名探偵に仕立てたことが、非現実的に思えてきたのに対し、この小林少年の役割を名探偵の助手にもってきたのがまだしも実在感に近づける効果があった。」⁽¹⁷⁾と述べているように、乱歩作品では、従来の探偵の役割は大人へと明け渡し、少年たちは探偵助手として、身の丈にあった方法で事件にかかわるようになる。

乱歩の少年ものに明智探偵が抜擢された背景には、作品を依頼した『少年倶楽部』編集部への思惑がある。編集長をつとめた須藤憲三は当時を回想し、「主人公である名探偵は、多彩な特殊能力を身につけた、一種のスーパーマンであることが読者をひきつけるのである。シャーロック・ホームズにしても、半七にしても、むつつり右門にしても、みなそういう人物に設定されているではないか。そんな重い役割を少年にやらせようとするから、話がそらぞらしくなったり、すじが甘くなったりして感興をそぐ結果になる。」⁽¹⁸⁾と述べている。ここで須藤は、超人的な能力を持つことが求められる探偵役を子どもに任せることの困難さを指摘している。探偵には、犯罪によって破られた共同体の均衡を回復するという役割があり、事件が重大であるほど、その目的を完遂するためには高い能力が求められる。その重責を少年に負わせるから話に無理が生じてしまうというのだ。

そこで編集部は、すでに乱歩作品に幾度も登場してきた明智を探偵役として登場させることを提案する。しかし実際には、大人に探偵行為の全てを任せるわけではなく、多忙な明智に代わって探偵助手の小林少年がおおいに活躍し、そこに少年探偵団の面々も加わり、子どもたちが事件解決のために奔走することになる。事件の推理や犯人逮捕といった部分は大人に譲り、少年たちには聞き込みや尾行などの子どもにも可能な探偵活動をさせる。さらに、仏像に化けて犯人の隠れ家に潜入するといった、小柄な子どもならではの活躍の場面も用意される。

少年探偵団たちの等身大の冒険は、読者である子どもたちに「もしかしたら自分にもできるかも」という期待を持たせ、少年探偵の存在を身近なものにしたのである。

一方、戦後の子ども向けミステリーに目を転じると、探偵役の子どもたちには、より現実の少年少女の姿が投影されるようになる。中尾明は「あなたもわたしも名探偵：現代（一九八〇年代）探偵・推理児童文学作品調査ファイル」⁽¹⁹⁾において1980年代の様々な作品群を例示しながらそこに登場する探偵の特徴を挙げている。「夏休みだけ探偵団」シリーズや砂田弘の『少女探偵事件ファイル』（岩崎書店、1989）など、1980年代に探偵役をつとめるのはミステリー好きの子どもたちで、普段からシャーロック・ホームズや江戸川乱歩の作品を読みあさっているため、その知識をもとに自らが探偵となって身近で起きる事件を解決するといったケースが目立つようになる。特殊能力を持たなくても、古今東西のミステリーの知識が子どもたちの探偵活動を助けてくれるのである。

また中尾は、目につくのは少女たちの活躍で、特に男女混合の探偵団や探偵グループの場合、ホームズ役をつとめるのはたいてい少女であると指摘する。彼女たちは、成績優秀で行動力があり、腕力すらも男子を凌いでいることが多い。一方、少年の方はおっちょこちょいの三枚目タイプが多いと指摘される。乱歩作品にも少女探偵は登場するがその活躍の場は決して多くはなかった。対して1980年代の作品には少女探偵も多く、その存在感は増している。また、男女が一緒に事件を解決する作品も増えており、その傾向は現在でも大きく変わってはいない印象を受ける。

一方、事件について見てみると、「少年探偵団」シリーズでは、怪人やロボット、透明人間などが世間を騒がせるといった奇抜な設定が多かったが、現代のミステリーでは、あまりにも非現実的な設定の事件は扱われることが少なくなった。

ここまで、子ども向けミステリーにおける探偵の描かれ方を見てきた。ミステリー黎明期である大正時代には、特殊能力を備える探偵の役割がそのまま子どもにスライドされたため、物語の筋に無理が生じるようになった。そこで昭和に入ると、大人の探偵が事件の解明に当たるようになり、子どもはその補佐として活動するようになる。世間を騒がすような大事件を起こす怪人の相手には、やはり超人的な能力を持つ大人の探偵が必要だったのである。つまり、子どもの能力だけでは重大な犯罪の解明に当たることが困難であることが示されたのである。しかし、子どもなりに知恵をしほり、仲間と協力する少年探偵たちの姿は、それまで無欠な存在として描かれてきた探偵を身近なものに変えた。そして現代になると、より現実の子どもの姿に即した形で探偵活動を行うようになったため、事件も派手なものからより身近なものへと変化していったのである。

そこで改めて新庄の作品に目を戻すと、探偵役として登場するのは皆小学生である

が、どの事件も警察が捜査に乗り出すような重大な犯罪が中心として描かれている。

中尾は先の論文で「夏休みだけ探偵団」シリーズについて、「真犯人を推理する冴と麗の探偵ぶりが、いかにもいまどきの少女らしくて、読者を引きつける。ワトソンの語りにも、とぼけた味があって三百枚をこす作品に独特のリズムを与え、読者を飽きさせない。」⁽²⁰⁾として、「おそらく「夏休みだけ探偵団①二丁目の犬小屋盗難事件」は、一九八〇年代を代表する少年少女探偵・推理小説といえるだろう。」⁽²¹⁾と高く評価している。

また、石井直人は「夏休みだけ探偵団」シリーズについて、普通の小学生である主人公たちが警察を出し抜き事件を解決するという行為に対し「子どもなら一度はやってみたい」と考えるだろうとした上で、「探偵小説は、犯罪にまつわる社会問題、異常心理、残酷美など人間の暗部を映してしまいがちである。だから、子どもの探偵小説は、書きにくいともいえる。が、「夏休みだけ探偵団」は、すぐれた探偵小説であり、かつ自由で爽快なエンターテインメントになっている。」⁽²²⁾と評している。

ミステリー作家としての新庄への評価は高いものの、先行研究は数が限られており、特にそれらは「夏休みだけ探偵団」シリーズに言及したものに集中している。また、本稿が目的としている「探偵」の役割について詳細な分析を行ったものは見受けられなかった。

では、新庄はどのような方法を用い、話に無理を生じさせずに、「小学生探偵が重大な犯罪の謎に挑む」という状況を成立させたのだろうか。次章以降で具体的に作品の分析を行い、それを明らかにしていきたい。

2. 「夏休みだけ探偵団」シリーズ

2-1. シリーズの概要と事件の特徴

シリーズ1作目『二丁目の犬小屋盗難事件』（講談社、1988）⁽²³⁾は前述の通り新庄のデビュー作であり、シリーズを通して挿絵は岡本順が担当している。

物語はボンコツ自転車に乗る少年、和戸尊（通称ワトソン）の一人称の視点で展開する。彼は十段変速ギア付きの自転車を買ってもらう条件で、せっかくの夏休みにもかかわらず毎日学習塾に通っている。同じ塾に通っている飛田透（通称トン）の家の犬小屋が盗まれたと聞き、クラスメイトである双子の姉妹、保積冴と麗に事件の調査を依頼する。姉妹はミステリーマニアで、祖父から夏休みの間だけ探偵活動を許されており、ワトソンとトンも姉妹が結成した「夏休みだけ探偵団」の団員となり、一緒

に捜査を開始する。

犬小屋盗難事件は近所で複数発生しており、さらに最初の事件が起きるより前に、近所の邸宅から高価な宝石が盗まれていたことが分かる。犯人は逃走中に事故で死亡し、宝石はまだ見つかっていない。犬小屋と宝石の盗難事件にかかわりがあると睨んだ探偵団は、調査した手がかりから全ての謎を解き明かし、見事犯人を捕らえる。

このように本作では、いたずらかと思われた小さな事件（犬小屋盗難事件）の謎を追ううちに、より犯罪性の高い事件（宝石盗難事件）へとつながっていく。

これは同シリーズの他の作品にも見られる特徴である。2作目の『児童館の黒キリン事件』（講談社、1989）では、児童館で子どもが作った紙製のキリンがスプレーペンキで黒く塗りつぶされる事件が発生し（小さな事件）、その事件の調査を進めるうちに30年ほど前に起きた黄金のキリン像盗難事件（大きな事件）へとつながる。厚紙でできたキリンの事件が黄金のキリン（麒麟）の盗難事件へとつながるというのが、洒落がきいている。

3作目『桃太郎の赤い足あと事件』（講談社、1990）では、赤ペンキを塗られ体中にビニール紐が絡まった桃太郎という名のネコを見つけるところから事件が始まる（小さな事件）。桃太郎を追いかけ、探偵団は近くの倉庫で偽の消防自動車を発見する。それがピカソのパリ時代の作品を盗み出すために使用されたものと分かる（大きな事件）。絵を盗んだ犯人として、ワトソンたちが通う小学校の先生の婚約者が逮捕されてしまい、その無実を証明しようと、彼らは「探偵は夏休みだけ」という約束を破って捜査を行うのである。

1巻の中で、犬小屋盗難事件とシャーロック・ホームズの短編小説「六つのナポレオン像」⁽²⁴⁾の展開の類似性が指摘される。各所で起きるナポレオンの石膏像破壊事件が宝石盗難事件につながるという内容だが、姉妹は犬小屋泥棒の犯人も、犬小屋を盗むことが目的なのではなく、他に理由があると推理する。ホームズの換骨奪胎とも言える展開だが⁽²⁵⁾、あえて作中で断わりを入れることで、事件の構造自体が謎を解くための手がかりとなる。

繰り返しになるが本シリーズでは、小さな事件の調査依頼が探偵団に持ち込まれ、それがより大きな事件へと発展していく。新庄は、小さな事件を経由することで、普通の小学生でも違和感なく犯罪事件の謎にたどりつけるようにしたのである。大人なら「単なるいたずらだろう」と相手にしないような些細な事件の背後に、実は重大な犯罪が隠れている。社会に潜んだ悪事が、子どもたちの活躍によって見事に暴き出されていくところに痛快さがあり、事件を解決した子どもたちから真相を聞いた警察が「うん、すばらしい。まったくすごい。信じられない。」「そうですね。ほくたち以上だ。」⁽²⁶⁾と彼らをほめるが、それは子どもたちにとっては何よりの勲章である。

2-2. 「探偵団」というチームの役割

「夏休みだけ探偵団」は4人の団員で構成されている。まずは探偵団の創設者である保積冴と麗の双子の姉妹。推理小説好きが高じて実際に探偵をやってみたくなったという筋金入りのミステリーマニアである。姉の冴の方が小柄で、捜査の際に関係者に質問を行うのは主に彼女であり、気が強くて男勝りである。妹の麗は背が高く、大人しくていつも静かに考えごとをしており、調査内容を書き留めるのは彼女の仕事である。続いて勉強が苦手な勘は鈍いが、身軽で事件解決の糸口をつかむことが多い和戸尊。彼は仲間からワトソンと呼ばれ、本家「シャーロック・ホームズ」のワトソン同様、物語は彼の一人称によって展開していく。そしてトンというあだ名で、1人だけ別の小学校に通う飛田透は、全部で4つも塾に通っている。1作目でも2作目でも最初に事件の話を持ちこむのは彼の役目で、地元に精通している。このように、チーム内でしっかりと役割分担されている。

前章で確認した通り男女混合の探偵団は、確かに少女の方が少年に比べて行動力があり、事件解決に向けての推進力を持つ。しかし逞しい少女たちにも苦手なことはあり、その時は少年に代わりをつとめてもらう。例えば、身軽なワトソンは木登りや鉄棒などが得意で、高いところに登って調査をするような時に面目躍如の活躍をする。石井は前出のエッセイでワトソンについて次のように述べる。

ホームズ物の鍵を握るのは、ワトソンだった。あの「間抜けな友人」によってホームズの高速度な推理を読者にゆっくりと説明することができたからだ。「夏休みだけ探偵団」も、その名も和戸尊すなわちワトソンという間抜けな男の子が語るのである。彼は、大切なヒントを見落したり、犯罪事件をのんびりムードの話に変えたりする不可欠の重要人物なのだ。

(「夏休みだけ探偵団」シリーズ)『児童文学の魅力：いま読む100冊・日本編』文溪堂、1998、p.234)

ワトソンは、難しい用語が出てきた時や双子が事件の推理を披露する際などに、すかさずミステリー初心者然とした態度で質問を投げかけてくれるため、一番読者に近い立場で作品のフォローをしてくれる存在なのである。

新庄は少年時代、江戸川乱歩の「少年探偵団」に魅了された理由として「探偵は大人の仕事、子供には無理。でも、探偵団なら出来る。そんな気持ちも、夢中になった一因」⁽²⁷⁾と述べている。子どもでも仲間と協力すれば、大人と同じように探偵になれる。乱歩の「少年探偵団」は10人から多い時は20人以上の大所帯になり、個人よりも

集団の力で事件を解決に導くことも多い。ケストナーの『エーミールと探偵たち』では、エーミールが、盗まれたお金を取り戻すために犯人を追跡するが、協力してくれるのは都会の街で出会ったたくさんの子どもたちである。圧倒的な数の子どもたちが犯人の周りを取り囲む場面では、子どもたちの集団の力がユーモラスに強調されている。

社会的にも体力的にも大人より未熟な子どもたちであっても、「探偵団」というチームを編成することで、お互いに足りない能力を補強し、重大事件の犯人にも太刀打ちできるようになる。乱歩から引き継がれた「探偵団」の物語は、子どもが力を合わせることで大人と対等に渡り合える可能性を示してくれる。

2-3. 「夏休み」という枠組み

本シリーズの探偵団は、「夏休みだけ」という制約のもとに保護者から探偵活動を認められている。

「冴と麗は、夏休みだけの探偵かい。かんばんにそう書いてあったけど。」／麗が肩をすくめて、／「うん、おじいちゃんとのやくそくなの。『夏休みだけならいいだろう。』って、名刺も、そういうやくそくでつくってもらったの。二学期がはじまったら、学校でいそがしくなっちゃうでしょ。」

(『夏休みだけ探偵団①二丁目の犬小屋盗難事件』1988、p.31)

冴と麗の両親は仕事でアフリカに滞在しており、今は祖父と家政婦のタミ子さんと暮らしている。双子の祖父は元探偵で合気道の名人でもあり、冴と麗は祖父から教わった合気道の腕前で、犯人相手に大立ち回りを繰り広げることもある。

双子の祖父は、姉妹のために名刺を刷り、事務所を提供し、知り合いの新聞記者から事件の情報を得るなど、その探偵活動に協力を惜しまないが、一方でそれはあくまでも「夏休みだけ」だと釘をさす。

しかし、そもそも子どものごっこ遊びの延長とも言える探偵団の活動に、保護者の許可が必要なのだろうか。これは双子の祖父が探偵を自身の生業にしていたことも関係しているだろう。孫の「探偵」に対する想いが理解できるからこそ、活動を認めれば学業をおろそかにするほど夢中になることも想像がつく。子どもの本分はあくまで学業にあると考える祖父の折衷案として、特別に「夏休みの間だけなら探偵活動してもよい」という条件付きの許しを与えるのである。

では、本作における「夏休み」という物語の枠組みはどのような意味を持つのだろ

うか。

普段子どもたちは学校中心の生活を送っているが、この間は授業が免除され、学校の管理下から離れる。新庄は自身の学校生活と夏休みへの思いについて次のように語っている。

毎日の学校通いは桎梏でした。／学校には、仲のいい友達がいって、休み時間があって、給食があって、遠足があって、スポーツ大会があって……好きなところもたくさんありました。けれど、それでもやはり毎週やってくる日曜日を待ち遠しく感じられたのは、学校が脅威として見えた時代、無変化に繰り返される日々を、苦痛として感じていたからだと思います。／（中略）／ですから、学校に通わなくてもよい夏休みは、相対として、実に開放的で自由なものでした。その思いが、夏休みという舞台を用意させました。

（『夏休みの物語』『日本児童文学』45巻4号、日本児童文学者協会、1999.8、p.36）

新庄は、学校に通うことを「桎梏」という言葉で表現しており、教育カリキュラムが厳密に定められた学校の管理体制に対して苦痛を抱いていたことを告白している。新庄にとっては学校に行かなくてもよい夏休みは、夢のような時間だったのである。

だが、「夏休み」は「学校に通わなくてもよい」という意味では確かに「開放的で自由なもの」ではあるが、作中でもトンが学習塾に4つも通っていたように、1970年代末ごろから受験戦争が激化していき、本作が書かれた1980年代末は塾全盛時代に突入し、夏休みだからと言ってのんびりできない子どもも多かったのである。

「夏休みだけ探偵団」は、新庄が自身の双子の娘たちに読み聞かせるために創作された物語である。新庄自身も、自分の子どもたちの日常生活を目の当たりにして、現実の子どもたちの置かれている環境の過酷さを実感していたはずである。そこで新庄は、「子どもが探偵になって大人も驚くような難事件を解決する」という夢物語のような状況を、双子の祖父からの許可を盾に「夏休み」という枠組みの中で描ききることで、子どもたちを現実の束縛から解放するのである⁽²⁸⁾。

しかし、シリーズ3作目では「先生の婚約者の無実を晴らす」という大義名分のため、本来「夏休みだけ」のはずだった探偵団の活動が2学期になっても継続されてしまう。佐藤は「ときには、作者と読者のいわば共犯関係で、「夏休み」の特異性はなくずし的に日常の中へなだれこまされる。（中略）物語継続の要請があるとき、かくていとも簡単に「夏休み」の規範はくずされる。」⁽²⁹⁾と述べているが、ここで指摘されている「物語継続の要請」とは、続編を望む読者からの期待と、それを受けた編

集部からの要望によるものだろう。それだけ作品の人気が高いということの証左でもあるが、作品が商品である以上それを売るためには、物語の枠組みすら外されてしまうのだとも言える。

本来「夏休み」の冒険を終えた子どもたちは、ひと回り成長した姿で学校という日常に回収されていく。シルクという名の少女が「いまは二学期よ。『二学期も探偵団』じゃないとおかしいわ。」⁽³⁰⁾と口にしたように、夏休みを終えての活動にはどこか不自然さが残る。読者がいくら望んだとしても、夏休みを永遠に継続することはできない。新庄は「夏休み」という枠組みを用いることによって、多忙な日々を過ごす小学生に「探偵」という夢を与えることができたが、そこに商業主義による要請が加えられたことにより、一気に現実に戻されてしまった。「夏休み」という子どもだけに与えられた特権的な時間は終わりが約束されているからこそ、「探偵」という非日常的体験が特別なものとして意味を持つのである。

3. 「名探偵チビー」シリーズ

3-1. シリーズの概要と事件の特徴

新庄が「夏休みだけ探偵団」シリーズの次に手がけた探偵ものは、ネズミが主人公の「名探偵チビー」シリーズで、1994年から1996年までに6冊刊行されている。本シリーズは第42回産経児童出版文化賞の推薦作品となり、挿絵は国井節が担当した⁽³¹⁾。

主人公、ベンジャミン＝チビーは小学生にして私立探偵をつとめるネズミの少年である。普段はランドセルを背負って小学校に通っているが、ひとたび事件の依頼が舞い込めば、授業はそっちのけで捜査に励む。彼の父は有名な私立探偵でこれまで数々の難事件を解決してきたが、3年前に夫婦でスネ湖の怪獣事件の捜査に向かい、行方不明になっている。作品の語り手をつとめるのは、チビーのクラスメイト兼友人のトマス＝ニヤットというネコの少年で、「夏休みだけ探偵団」のワトソンに似て、抜けたところがあり推理力もないが、探偵助手として小柄で身体的に非力なチビーのサポートをしている。他にもチビーたちの同級生で腕利き新聞記者である野ウサギ少女のタラッタ＝ダンスや、いつもチビーに手柄を取られているオンドリのサイラス＝ケッコー警部などの個性豊かな登場人物が脇を固め、様々な難事件に挑むのである。

前章で確認したように「夏休みだけ探偵団」シリーズにおける事件の特徴は、基本的に社会的に影響の少ない小さな事件の調査依頼が探偵団に持ち込まれ、それがより

大きな事件へ発展していくというものであったが、これと同様の特徴を持つ作品は、『虹色プールの謎』（講談社、1994）、『泣き虫せんたく屋の謎』（講談社、1994）、『黄金カボチャの謎』（講談社、1996）の3作である。ただし、国家存亡にかかわる軍事機密の設計図（『泣き虫せんたく屋の謎』）や村の命運を左右する古文書（『黄金カボチャの謎』）の盗難など犯罪の社会的影響が強くなり、その分探偵活動に対する責任も重くなっている。

他には、美術館の名画盗難事件をめぐる父のライバルだった警察署長と知恵比べを行う『雨あがり美術館の謎』（講談社、1994）や、ケーキコンクールの開催中止を要求する脅迫状が届く『首なし雪だるまの謎』（講談社、1994）、童謡になぞらえて連続見立て事件が起きる『一角ナマズの謎』（講談社、1996）がある。

探偵として数々の実績を上げるチビーのもとには様々な事件が舞い込んでくる。どこまでも探偵の能力だけが評価の対象となる実力主義の世界である。そのため、市長や美術館長など、街の実力者からも直々に依頼がくる。その結果、「夏休みだけ探偵団」シリーズよりも事件の幅が広がり、より本格的な謎を追うことになる。

3-2. 擬人化——「わたし」の二重性

ネズミ探偵と言え、シャーロキアン（シャーロック・ホームズの愛好家）の間で知られているのが、イブ・タイタスが描くネズミのベイジル探偵である。ベイジルは、シャーロック・ホームズを師と仰ぎ、ホームズの住居の地下にネズミの街を建設する⁽³²⁾。人間界のミニチュア版のようなネズミの世界が、人間の足元に並存している。

一方、「名探偵チビー」シリーズの舞台は、ネズミだけでなく様々な動物が共生する世界であり、そこに人間は登場しない。本シリーズの登場人物は擬人化で描かれているが、ではなぜ新庄は、彼らを動物の姿にしたのだろうか。

擬人化の効果について、林美千代は次のように述べている。

科学が対象を客観的に見つめ、対象と距離をとることから進歩してきたとするならば、物語は、共感することによって想像を容易にし、対象のイメージを広げてきた。物語中の動物の、置かれている状況を共感的に理解し、動物の現実を新しい自分の現実として直面するのである。子どもの消化のために口あたりのよい作品を作るというのではなく、人間と動物を重ね合わせ考え、人間についての新しい認識を得るために擬人化がパワーを発揮するのではないだろうか。大人でもこのように擬人化された話は、面白いのである。

（「なぜウサギはスカートをはくのか？」『日本児童文学』40巻6号、文溪堂、1994.6、pp.72-73）

林は擬人化によって、動物に共感し「動物の現実」を「新しい自分の現実」として受け入れる効果があると述べているが、これを「名探偵チビー」シリーズに置き換えると、ここで言う「動物の現実」とは、「小学生でも職業が持てる」ということである。これは、「夏休みだけ探偵団」シリーズとの最大の相違点でもある。

日本の現実では、労働基準法によって児童は満15歳に達した日以後の最初の3月31日が終了するまで働かせることが原則として禁止されている。また、例外として働かせることが可能な場合も、行政官庁の許可を得た上で、修学に差し支えないことを証明する学校長の証明書と親権者又は後見人の同意書が必要であり、子どもはあくまでも学業が優先されるのである⁽³³⁾。

しかしチビーの世界には人間界のこのルールは適用されず、小学生でも仕事を持つことができ、さらに仕事が忙しい時は学校を休むことが許可されている。勉強が嫌いな探偵助手のニャットにとっては夢のような状況である。

もちろん、子どもは仕事より勉強のほうがだいじだから、仕事は勉強の合間をみてやっている。／でも、いそがしいときもある。そういうときは、町の決まりで、学校を休んでいいことになっている。だから難事件、それも、解決するのに何日もかかるような事件さえおこれば、ボクは、あの地獄からの使者、ブルドッグのブール校長と顔をあわせないですむし、チビーも元気をとりもどす。一挙両得ってわけだ。

（『名探偵チビー：泣き虫せんたく屋の謎』p.14）

「夏休みだけ探偵団」も学業優先のため、原則としては夏休みしか探偵活動ができず、しかも基本的に午後5時になったら捜査を打ち切って家に帰らなければならなかった。大人の管理下にある子どもたちは、大人との様々な約束事に則って行動する。

しかしチビーの世界では、子どもであっても仕事に責任を持つことが求められ、事件が起きれば徹夜で調査することもあるし、それを咎める大人もいない。

大正期の少年探偵たちは、大人の能力をそのまま子どもにスライドさせただけだったため、彼らは学校を退学して私立探偵として働き、現実離れした特殊能力によって次々と事件を解決していた。しかし、子どもの姿とそれに不釣り合いな能力という矛盾によって、物語の筋に無理が生じるようになってしまったのである。

それに対し新庄は、擬人化を用いることによって小学生であるチビーを、子どもを取り巻く様々な束縛から解放し、大正期の少年探偵たちが抱えた問題をクリアすることに成功したのである。また、大人と対等に接するチビーの堂々とした立ち居振る舞いや言動についても、チビーをネズミの姿にすることで、読者に違和感なく受け入れさせることを可能にした。

しかし、子どもに加えられるあらゆる制約を全て取り払ってしまうと、小学生が探偵をすることの必然性がなくなってしまう。そこで、チビーを「ネズミ」に設定することで、肉体的なハンディを加えている。椅子に座ると机の影に隠れて姿が見えなくなるほど小柄なチビーは、調査するにも苦勞が多い。そのため探偵助手の存在は重要で、ネズミのチビーはネコのニャットの手を借りることで、初めて事件を解決することができるのである。

また、中尾は「ミステリーに見る犯罪と子どもたち」⁽³⁴⁾という論文の中で、一般向けのミステリーでは犯罪の中心となる殺人事件が、子ども向けになると描くことが難しくなることを指摘している。それは、子どもの目から殺人を遠ざけたいからではなく、殺人が日常的に多発し、子どもたちがそれにかかわって犯人捜しをするようなミステリーが現実的ではなく嘘っぱいからだと述べている。しかし、探偵に二重の要素を持たせることで、子どもでも違和感なく殺人事件の捜査に当たれるとし、具体的な作品例として那須正幹の『お江戸の百太郎：秋祭なぞの富くじ』（岩崎書店、1992）と、舟崎克彦の『ピカソ君の探偵帳』（福音館書店、1983）を挙げている。前者は、江戸を舞台にした時代ミステリーで、「作者は捕り物帖という虚構の世界で、百太郎に十三歳の少年でありながら大人、つまり岡っ引きの助手という二重性を与え、これまでの児童文学のタブーをクリアして、ミステリーに殺人事件を持ちこむことに成功したのだ。」⁽³⁵⁾と述べている。後者は、事故によって十数年間意識不明となり、身体の成長が止まってしまったピカソ君という人物が主人公で、彼は23歳と小学6年生という2つの顔を持っている。ピカソ君はランドセルを背負い小学校に通いながら、23歳の社会人として「ピカソ探偵事務所」を営んでいる。

チビーの物語では殺人事件は起こらないが、百太郎やピカソ君のように二重性を与え、擬人化によって動物界の現実（新しいルール）を適用し、「小学生のわたし」と「私立探偵のわたし」を共存させることに成功している。読者は、背広姿にペロペロキャンディーという大人と子どもの相反するアイコンを背負うネズミの姿に違和感ではなく親しみを覚え、「新しい自分の現実」として物語に共感することができるようになったのである。

3-3. 推理が明らかにするもの

本シリーズには毎回「読者への挑戦」が付与されている。推理小説では、事件を解決するのに必要な全ての手がかりを読者に提示し、地の文に嘘を書かないフェアプレイが求められる。「読者への挑戦」の中で新庄は、「推理は、算数の文章題を解くのおなじです。お話の中にかくされた手がかりを見つけだし、計算式をつくり、たしたりひいたり、かけたりわったりして答えをだします。もちろん、ほんとうに計算するわけではありません。推理をするのです。」⁽³⁶⁾と述べている。

物語の中でも、チビーは様々な場面で「推理」にまつわる発言をしている。

「ぼくは、人にほめられたくて探偵をやってるんじゃない。推理するのが好きなんだ。推理によって複雑な謎が解け、唯一の答えが導きだされたときの満足感……。この気持ちをあじわいたくて、探偵をしてるんだ。」

(『名探偵チビー：虹色プールの謎』 p.150)

「たしかに推理は想像です。絵をかくこととにているかもしれません。しかし、方法はちがいます。絵ふでは使いません。」／チビーの目は、炎のようにキラキラかがやいている。／「ジグソーパズルのように、手がかりのピースを組み立てて、絵をつくっていくのです。はめこむ場所を一つでもまちがえたら、絵は完成しません。できあがる絵柄はただ一つ——。」／チビーは気をもたせるように間をとり、／「真実です。」／と、強くいった。

(『名探偵チビー：泣き虫せんたく屋の謎』 pp.169-170)

チビーは推理によって、「唯一の答え＝真実」が導きだされると語る。これは、フリーマンが、読者の求める「知的満足」を与えるために、推理小説では論理的な筋道によってそれ以外の結論がありえないということを立証し、物語にきちんとした「決着をつけること」が最も大切なだと指摘したことに符号する。推理小説は真実を導き出す文学であると言えるが、では、真実とは一体何だろうか。それを明らかにするために、シリーズ3作目の『泣き虫せんたく屋の謎』に着目したい。

物語は、いつも自信家のチビーが元気をなくしてとぼとぼ歩いている場面から始まる。チビーは学校行事である秋の親子遠足をきっかけに、両親がスネ湖の怪獣事件調査の最中に行方不明になったことを思い出してしまったのだ。ニャットは「みんなは、もう望みが無いといっているけど、チビーだけは、両親は生きてると、かたく信じている。その気持ちが心の中で大きくふくらんだのだろう。いっしょに暮らして

いたころの楽しい思い出が、チビーの元気をうばってしまったのだ。』⁽³⁷⁾とチビーの気持ちを推しはかる。ニャットとダンスは、チビーに元気になってもらおうとサーカスに誘うが、会場に向かう途中でクリーニング屋の物干し場が荒らされる事件に遭遇する。店主から犯人を捕まえて欲しいと依頼されて調査を行うと、同夜に近所の研究所から軍事機密の設計図が盗まれたことが分かり、そちらの捜査も依頼される。チビーは珍しく、設計図を取り返す代わりに、博士が研究していた水中自動車が完成した暁には、それを貸して欲しいと交換条件を出す。

そしてチビーは、ジグソーパズルのピースをはめていくように、捜査によって手に入れた手がかりを1つ1つ組み立てていき、「真実」にたどり着く。正体を暴かれた犯人は逃走を図り、普段は頼りないニャットが「必殺のつめ」を使ってそれを阻止しようとするも、その甲斐虚しく犯人を取り逃がしてしまう。シリーズ唯一の失敗であるが、ニャットのつめによって犯人が設計図を落としていったことが分かり、犯人は捕まえ損ねたが、軍事機密の設計図が国外に流出することを防ぎ、見事国家存亡の危機を救うのである。

しかしチビーにとっては国家の危機を救ったことよりも、設計図を取り戻したおかげで水中自動車を使わせてもらえるということの方が重要なのであった。なぜそれほどまでにチビーは水中自動車にこだわったのか。

「お父さんとお母さん、生きてるって信じてるのね……。」／ダンスの声がしずんだ。チビーは街路灯を見あげる。／「スネ湖の湖底には、うしなわれた世界にうじるトンネルがあるって伝説がある。ときどき発生するうずは、そこに水が流れこむとき生じるっていわれてるし、スネ湖に出没する怪獣も、そこを通過くるともいわれてる。お父さんとお母さんは、そのトンネルにすいこまれて、うしなわれた世界へいったにちがいないんだ。」／チビーは、明るい街路灯をまばたきもしないで見つめたまま、／「湖にボートでこぎだしたとき、父と母は潜水具をつけていた。おぼれはしない。ぜったい生きてる。うしなわれた世界で生きてる。」

(『名探偵チビー：泣き虫せんたく屋の謎』 p.179)

論理的な思考の持ち主のチビーにしては珍しく「うしなわれた世界」という曖昧なものに両親生存の可能性を見い出す。まるで、両親が事故で亡くなったという現実を受け入れられず、空想の世界にすがりついているようにも見える。ニャットも同様のことを考えたようで、チビーに次のように声をかける。

「でもさ、潜水艇を使って何度も調査したんだろ。むりだよ。」／ボクはチビーを現実の世界にひきもどそうと、事実をいった。／「あら、ニヤットくん、スネ湖のこと知らないの？」／ダンスが、ボクとチビーのあいだにわってはいった。／「湖の底は水草や藻が多くて、潜水艇では調査できなかったのよ。スクリューにからみついちやうからだって、新聞にでてたわ。まだ、ぜんぶしらべ終わってないのよ。」

(『名探偵チビー：泣き虫せんたく屋の謎』 p.179)

ニヤットは「事実」という言葉を使用しているが、「真実」と「事実」は別物である。ここでニヤットが述べている「事実」とは、「三年前の霧の深い日に、チビーの両親はボートで調査に出かけ、大うず巻きに巻き込まれて消えてしまった」ということである。これだけでは、両親の安否を断定することはできない。ただ、3年間も連絡がないのだからチビーの両親は助からなかったのだろう、と多くの人が考えており、それがまるで「真実」であるかのように思い込んでいる。「真実」が果たして「事実」の通りなのか、それを判断するには材料が足りない。ダンスが指摘するように、まだ全ての調査は完了していないのである。全ての手がかりが揃わなければ、推理はできない。それでは単なる想像になってしまう。たったひとつの「真実」を明らかにするまで、チビーは両親が活着していると信じて、探偵を続けるだろう。

池上冬樹は『二丁目の犬小屋盗難事件』の新版に解説として次の文章を寄せている。

ぼくらのまわりにはたくさんの事実があります。受け入れたくない事実（友人たちにいじめられたとか、好きな人にふられたとか、愛する家族やペットがなくなったとか）もあります。でも、そこから考えてください。これこれこういう理由でこうなったのだ、と冷静に考えましょう。あなたが悪いわけではないこともたびたびです。でも、その事実はかえられません。そのときは未来に向けて事実を考えましょう。自分はいったい何に向かって悩み苦しんでいるのだろうと。いまは見いだせなくても、きっと真実は未来のなかにあります。

(「事実と向き合うこと」『夏休みだけ探偵団 二丁目の犬小屋盗難事件』日本標準、2009、p.293)

ここで池上は、事実はすでに起きてしまった過去の出来事であり変えることはできないが、真実は未来の中にある、つまり未来は変えることができると示唆している。池上が述べているように、ひとつひとつの事実について因果関係を冷静に捉える行為

を繰り返すことで、自分なりの解決策（新たな真実）を見つけ出すことができるかもしれない。

我々の人生における正義の天秤は、推理小説のようにきれいに均衡が回復するわけではないが、探偵ならばどんな状況でもこの天秤の均衡を保つために働かなくてはならない。

世の中にはチビーが抱えるような、自分の力では変えられない理不尽な出来事がたくさん存在する。そのような出来事に直面した時は、物語に出てくる探偵のように、周りの声に惑わされず、全ての手がかりを集め、あらゆる角度から観察し、思索し、推理する。そうすることでひとつの「真実」が見いだせる。それはもしかしたら明るい未来を示してくれるかもしれない。

4. 「マエストロ！ MONNA 探偵事務所」シリーズ

4-1. シリーズの概要と犯行動機の複雑化

「マエストロ！ MONNA 探偵事務所」シリーズ（以下、「MONNA」シリーズ」と表記）は、著者が3番目に手がけた探偵もので、新装版を除き、現時点で商業出版されている最後の新庄作品でもある。シリーズは2冊刊行され、大庭賢哉が挿絵を手がける。

語り手は門奈大夢（タイム）という少年で、頼りないところがあるがクラスで一番の運動神経を持ち、実家は骨董品店を営んでいる。彼の家には門奈弥五郎⁽³⁸⁾と言う名の親類（父の曾祖父の兄）が暮らしている。彼は永らく行方不明だったが、渡欧して大金持ちになり、最後は家族に見守られて息を引き取りたいと、たった1人の血縁者だったタイムの父を見つけ出し、自宅兼店舗の改装費用を出す代わりに同居を認めさせたのである。100歳を超え、普段はボーッとしていることが多いが、ひとたび事件が起きると突如頭のスイッチが入り、見事な推理を披露する。所有する本の90%がミステリーという探偵オタクの幼なじみ、尾田芽杜（メモリ）と共に3人で、町で発生する怪事件の謎を追う。

このように、本シリーズでは「子ども＋高齢者」の組み合わせで探偵活動が行われる。これまでの作品と同様に、本シリーズも犯罪性の低い小さな事件から端を発し、それがより大きな事件へと展開するが、犯行の動機に他のシリーズと異なる特徴が見られる。

シリーズ1作目の『怪盗ベースボール事件』（ポプラ社、2005）では4つの動物

グッズが連続して盗まれ、代わりに「怪盗ベースボール」と書かれた野球用品がそれぞれ置かれるという事件が発生する。最後に盗まれたのは、観光ホテルにあった「ねむりタヌキ」という木彫りの置物で、金銭的価値はないが先祖代々伝わる家宝として大切にされているものだった。トリックまで用いて密室を作り出すなど、念入りの計画のもと実行された連続盗難事件だったが、その犯行動機は、「仕事で叱られたことへの仕返し」という実につまらない理由であった。

「だが、ちょっとおこられたくらいで、これほど手のこんだ事件をおこすとは……」／アメンボは、顔をしかめた。／「最近は、ちょっとしたことで、とんでもないことをしでかす人たちがふえてますからね」／モヤシが、よこでいった。／「たしかにな。それも、小説やテレビドラマや映画の影響か、重大な事件が多い」／アメンボが、モヤシにむかってうなづく。／「おじいちゃんも、おなじようなことをいってた」／メモリが、しずかにいった。／「『心にひっかかった、ちょっとしたことが頭の中でどんどんふくらんで、ついには自分ではコントロールできないほど巨大化して怪物みたいにひとり歩きしはじめ、あんなややこしいことをやってしまったんじゃないだろう』って。『むかしだったら事件の種にもならないような理由で、これほどの計画犯罪をしでかすということはなかった。つまり、いまの世の中が、怪物をつくりだしているんじゃない』ともいってた」

(『マエストロ！ MONNA 探偵事務所：怪盗ベースボール事件』 pp.329-330)

ちょっとしたことが引き金となり、コントロールできずに暴走してしまう感情を弥五郎は「怪物」と呼んでいる。前章までに見てきた作品群では、このような私怨による犯罪は描かれていない。これまでは金品目的の盗難事件が多かったが、主に謎解きがメインとなっており、犯行理由についてはあまり話題にならなかった。今回の『怪盗ベースボール事件』では、犯行の裏側にある人間の闇の感情を描いている。

また、シリーズ2作目の『青ガエルの密室事件』(ポプラ社、2005)では、雑居ビルに入居する古書店で、稀観本とカエルの置物が盗まれる事件が発生し、同じビルに店舗を構える店主たちが犯人として疑われる。メモリたちは容疑者を集めて推理を披露するが、探偵から自分の犯行を暴かれる犯人の心境はどのようなものだろうか。穏やかな隣人という仮面が剥がれ落ち、これまで隠されていた裏の顔が露わになる。

作中、メモリが算数の応用問題に手こずるタイムに対し、あるアドバイスをする。

「考えかたをかえれば、こたえは案外かんたんにみつかるかもしれない。ものごとをひとつの方向からみてるからいけないのよ」／すまし顔でいった。／「な

に、いいたいんだ？」／ボクは、メモリの顔をのぞきこむ。／「だから、いろいろ視点を……見方をかえてみることの重要さをいつてるの」

(『マエストロ！ MONNA 探偵事務所：青ガエルの密室事件』 p.14、p.16⁽³⁹⁾)

人間は複雑な感情を持つ生き物であり、相手の一面だけを見て分かったような気になっている限り、その人の本質をつかむことはできない。

現実の世界では毎日多くの事件が報道され、子どもが巻き込まれる犯罪も後を絶たない。現代の子どもたちには、自分で自分の身を守る、サバイブする力が求められている。メモリが言うように、視点を変えて物事を多面的に見ることで、人間の複雑な心理を理解し、社会の本質を見抜く力を養うことが必要なかもしれない。

4-2. 子ども探偵の描きづらさと探偵能力の継承

本シリーズの探偵活動は、前述の通り「子ども＋高齢者」の組み合わせで行われる。前章までに取り扱った作品群では、全ての探偵活動は子どもだけで行われていたが、なぜ本シリーズでは、探偵の仲間として高齢者が据えられたのだろうか。

吉田純子は、近世から近代にかけてのヨーロッパで、「赤頭巾」の話に見られる祖母と孫娘との距離の変化に「近代家族」の誕生を重ねた上で、次のように述べる。

周知のとおり、核家族を形成した〈近代家族〉は「男は外、女は内」という公私の分離に基づく性別役割によって、男は外で仕事をし、女は内で生殖にまつわる仕事（子産み・子育て）をし、家族が一単位となって社会の生産性・経済性に貢献してきた。見方を変えれば、〈近代家族〉は老人を家族から切り離して、「森の中か、森の外れか、村外れ」に住まわせて「周縁化」することで成立してきたとも言える。また、老年期は、人生の中では旺盛な労働や生殖活動期の終息期にあたる。つまり、老人は、人生の終わりに位置し、人生の初めに位置する子どもとともに周縁的な存在である。

(「老人と子どもが「森」で出会うとき：『西の魔女が死んだ』『ザ・ギバー』にみられる老人と子ども』『日本児童文学』42巻4号、文溪堂、1996.4、pp.40-41)

吉田が指摘するように、高齢者と子どもはどちらも社会活動の中心からは離れた位置にいる。人間として未熟な存在とみなされ、大人から多くの制限を課せられている子どもと同様、肉体的にも精神的にも機能が低下していく高齢者は、成人に比べると様々な面で能力的ハンディを背負うことになる。そのため両者は時にシンパシーを抱

き、結びつきやすくなる。その一方で、高齢者は生きてきた時間の分だけ知識や経験、能力が蓄積されているため、先達として子どもたちをサポートすることができる。

本シリーズの探偵、門奈弥五郎は御年104歳で「じいちゃんは、ただの年寄りじゃない、超老人……メモリがまえいった、^{マエストロ}超老探偵ってやつなんだ。」⁽⁴⁰⁾と紹介されるが、弥五郎は足が悪いため普段は車いすを使用しており、自身が積極的に捜査活動を行うことは難しい。また、調査の途中で眠ってしまったり、突然頭のスイッチが切れたようにボーッとしたりと、探偵としては頼りない面も覗かせる。

しかし、推理の弱点を指摘したり、調査のコツを教えたりと、探偵としてのいろはを子どもたちに伝授して、自身の技能を子どもたちに継承する役目を担い、さらに弥五郎は、ヒントを出して子どもたちに犯人を推理させるなど、援助者として彼らをサポートする。

「夏休みだけ探偵団」シリーズの頃は、近所の交番に情報収集に行けば好意的に迎えられ、被害者の名前どころか家の地図まで書いて教えてくれていたが、「MONNA」シリーズ刊行の2005年は個人情報保護法が施行された年であり、交番に行っても以前のように事件の情報を教えてもらうことは難しくなった。現にタイムたちは捜査情報を聞きに交番に出向くも、軽くあしらわれてすぐに追い出されてしまう。

さらに「夏休みだけ探偵団」では、成人男性の犯人を小学生の双子の姉妹が合気道で倒す場面が描かれたが、本シリーズでは「力じゃ大人にかなわない」⁽⁴¹⁾とハッキリ言い切っており、タイムとメモリは犯人から追い詰められてしまう。それを救うのも弥五郎の役割で、傘の柄を巧みに使い犯人を見事に倒す。

2000年代に書かれた本作では、現実社会の状況を物語に反映させようとした結果、小学生だけで探偵を行い、大人の犯人と対峙することの限界が露呈している。新庄は、「^{マエストロ}超老探偵」の弥五郎を仲間にすることで辛うじて子どもたちの探偵活動を継続させる。

そして「^{マエストロ}超老探偵」から子どもたちへ、探偵としての技能が継承されるが、その継承は親類のタイムではなく、主に幼なじみのメモリに対して行われる。探偵の素質は遺伝ではなく、ミステリーに対する深い愛情によって培われる。弥五郎は、タイムのことを「小林くん」と呼ぶが、これは江戸川乱歩が生み出した名探偵・明智小五郎の少年助手、小林芳雄の名である。新庄が乱歩を始めとするたくさんのミステリーから学んだ推理の面白さや探偵の魅力は、次の世代の子ども読者にこうして引き継がれていくのである。

おわりに

江戸川乱歩の「怪人二十面相」が誕生してから85年の歳月が流れ、その間、子どもを取り巻く状況は大きく様変わりした。日本の子ども向けミステリーに登場する探偵の姿も時代に合わせて、超人的な存在から身近な存在へと変化していき、それに伴い作中で起きる事件も日常の中で起こりうる現実的なものへと変わっていった。

探偵は、共同体において「正義の天秤」が悪の側に傾いた際に、謎を解明することで均衡の回復を図る役割を担う。しかし、特にこの天秤が重大な犯罪によって大きく傾いた場合、子どもに探偵役を任せることには難しさがあった。なぜならば、大人に比べて、子どもは肉体的にも精神的にも未熟であり、そのため日常生活の中で、大人から様々な制限が課されているからである。

そのような状況で、新庄がどのような方法でそれを乗り越え、子どもたちに探偵をさせたのかを、3つのシリーズ作品における事件や探偵の描かれ方の分析を行い検討した。

新庄は、子どもに課せられた制限を「夏休み」という物語の枠組みを用いたり、擬人化によって新たな現実を付与したり、先達をサポート役として探偵に加えることで、子どもたちをその制限から解放し、犯罪の謎に立ち向かわせることを可能にした。

時代によって描かれ方が変わっても「探偵」に求められることの本質は変わらない。新庄は『二丁目の犬小屋盗難事件』新版のあとがきで、「探偵」になるには、「知識と知恵と、ほんの少しの冒険心」⁽⁴²⁾の3つが必要だと述べる。冒険心は好奇心と言い換えられるが、不思議なことに興味を持ち、一歩踏みだして探偵してみようと誘いかける。

知識とそれを活かす知恵を得て、世の中の不思議を追い求めたいという冒険心を持つ。そして、情報を集める捜査能力や、集めた手がかりを分析して真実を導き出す推理力を身につけることで「探偵」としての技能が磨かれていく。時には、犯人を追いかけるための体力や身体能力なども必要になるが、苦手な分野は仲間と協力すればよい。

子ども向けミステリーには、多くの魅力的な探偵が登場するが、彼らを水先案内人に、読者は物語の中で様々な事件に遭遇し、推理を通して真相にたどり着く。推理小説の探偵たちは、普段は隠れている人間の複雑な感情や社会に潜む悪事を明るみに出し、推理を通して真実を見抜く力の重要性も示す。探偵は、謎解きの面白さを通して、読者に現実世界を生き抜くためのヒントを教えてくれる。

文末脚注

- (1) 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集 第28巻：探偵小説四十年（上）』光文社文庫、2006、p.673
- (2) 新庄節美「胸に輝く BD バッジ」『日本児童文学』36巻11号、文溪堂、1990.11、p.45
- (3) 戸川安宣「新庄節美の世界」新庄節美『スカーレット・パラソル①はじまりはブルームーン 青い月』創元推理文庫解説、2004、p.253
- (4) 権田萬治・新保博久監修『日本ミステリー事典』（新潮社、2000）の「探偵小説」の項より一部を抜粋（p.195）。
- (5) Freeman, Richard Austin. *The Art of the Detective Story*. 1924
- (6) リチャード・オースティン・フリーマン、松尾恭子訳「探偵小説の技法」ハワード・ヘイクラフト編、仁賀克雄編訳『ミステリの美学』成甲書房、2003、p.110
- (7) 江戸川乱歩「探偵小説の定義と類別」『幻影城』岩谷書店、1951、p.1
- (8) ボワロー＝ナルスジャック（Boileau-Narcejac）は、ピエール・ボワロー（Boileau, Pierre）とトマ・ナルスジャック（Narcejac, Thomas）の共同ペンネーム。
- (9) Boileau-Narcejac. *Le Roman Policier*. Payot, 1964, p.16.
- (10) 権田萬治「推理小説の魅力」『学校図書館』361号、全国学校図書館協議会、1980.11、p.9
- (11) 同上、p.10
- (12) Kästner, Erich. *Emil und die Detektive*. 1929
- (13) 宮川健郎によれば「架空リアリズム」とは、「『宝島』や『トム・ソーヤーの冒険』、ケストナーの諸作品のように、日常的物語でありながら、描いている事件が非日常的であり、その事件が作中で完結する」といった創作方法であり、1950年代から鳥越信や古田足日、神宮輝夫らが使用し始めたと推定される。（『現代児童文学の語るもの』日本放送出版協会、1996、p.131）
- (14) 佐藤宗子「冒・犯・侵の構図：描かれた「犯罪」を追って」『日本児童文学』40巻5号、文溪堂、1994.5、p.14
- (15) 矢野智司『大人が子どもにおくりとどける40の物語：自己形成のためのレッスン』ミネルヴァ書房、2014、p.215
- (16) 中島河太郎編、尾崎秀樹ほか監修『少年小説大系 第7巻：少年探偵小説集』

三一書房、1986

- (17) 同上、p.533
- (18) 須藤憲三「乱歩先生の「少年もの」」『江戸川乱歩全集 月報8（第8巻）』講談社、1969、p.7
- (19) 中尾明「あなたもわたしも名探偵：現代（一九八〇年代）探偵・推理児童文学作品調査ファイル」『日本児童文学』36巻11号、文溪堂、1990.11
- (20) 同上、p.27
- (21) 同上、p.28
- (22) 石井直人「「夏休みだけ探偵団」シリーズ」日本児童文学者協会編『児童文学の魅力：いま読む100冊・日本編』文溪堂、1998、p.234
- (23) 同作は加筆修正の上、2009年に日本標準から新版が刊行されている。その際の挿絵は大庭賢哉が手がけている。
- (24) Doyle, Arthur Conan, Sir. “The Adventure of the Six Napoleons”. 1904
- (25) 世界で初めて意識的に推理小説を書いた人物はエドガー・アラン・ポーとされている。小松史生子は、ポーが「モルグ街の殺人」（1841）を皮切りに執筆した最初の3作の推理小説が「今日まで続く探偵小説および推理小説の基本話形とトリックの骨組みをすでに完璧に備えていた」（『乱歩が影響を受けた作家たち』『江戸川乱歩の迷宮世界』洋泉社、2014、p.44）と述べており、その後に執筆される多くの推理小説はこのオリジナルの模倣から発展して生まれたと言える。江戸川乱歩の筆名がエドガー・アラン・ポーのもじりであることは有名であるし、「少年探偵団」シリーズを乱歩自身「私流のルパン式少年探偵もの」（注1に同じ。p.675）と評しているように、そもそもミステリーはパロディやオマージュ、パスティーシュ作品であふれている。
- (26) 新庄節美『夏休みだけ探偵団①犬小屋盗難事件』講談社、1988、p.258
- (27) 注2に同じ。p.44
- (28) 夏休みを舞台とした子ども向けミステリーは多く、子どもたちの戦争ごっこと宝石窃盗団の逮捕が有機的に結びつくアストリッド・リンドグレンの『名探偵カッレくん』（Lindgren, Astrid. *Mästerdetektiven Blomkvist*. 1946）や、山に囲まれた田舎を舞台に廃校になる小学校の七不思議の謎を探るはやみねかおる『バイバイスクール』（講談社、1991）など、牧歌的で幸福な夏休みを描いたものも見受けられる。また、川北亮司『マリア探偵社：迷宮アイランド』（理論社、2004）や深沢美潮『IQ探偵ムー：夢羽のホノルル探偵団』（ポプラ社、2019）など、夏休みは旅先で事件に巻き込まれることも多い。
- (29) 佐藤宗子「「夏休み」への期待：規範の成立、拘束そして逸脱」『日本児童文

学』45巻4号、日本児童文学者協会、1999.8、p.13

- (30) 新庄節美『夏休みだけ探偵団③桃太郎の赤い足あと事件』講談社、1990、p.115
- (31) シリーズ2作目として刊行された『雨あがり美術館の謎』のみ2003年に講談社の青い鳥文庫に収録され、その際の挿絵は廣中薫が担当した。
- (32) 『ベイジル：ねずみの国のシャーロック・ホームズ』（イブ・タイタス、晴海耕平訳、童話館出版、2013）などが出版されている。（Titus, Eve. *Basil of Baker Street*. 1958）
- (33) 「児童の健康及び福祉に有害でなく、かつ、その労働が軽易なもの」については、行政官庁の許可を得ることで、修学時間外に働かせることができる。ただし労働時間の制限など、厳しく条件が規定されている。詳しくは労働基準法第56条、第57条などを参照。
- (34) 中尾明「ミステリーに見る犯罪と子どもたち」『日本児童文学』40巻5号、文溪堂、1994.5
- (35) 同上、p.30。実際には、那須正幹は現代を舞台にした『ぼくらはズッコケ探偵団』（ポプラ社、1979）ですでに殺人事件を扱っている。
- (36) 新庄節美『名探偵チビー：虹色プールの謎』講談社、1994、pp.116-117
- (37) 新庄節美『名探偵チビー：泣き虫せんたく屋の謎』講談社、1994、p.10
- (38) 著者唯一の大人向け推理小説『修羅の夏：江戸牙富蔵捕者暦』（東京創元社、2004）には、奉行所定廻り同心・門奈弥之助の娘お牙が安楽椅子探偵として登場する。
- (39) p.15は挿絵ページ。
- (40) 新庄節美『マエストロ！ MONNA 探偵事務所：怪盗ベースボール事件』ポプラ社、2005、p.141
- (41) 同上、p.315
- (42) 新庄節美『夏休みだけ探偵団 二丁目の犬小屋盗難事件』日本標準、2009、p.290